

仙台におけるデフォレスト先生 召天50周年記念行事

2023年7月1日(土)、仙台において墓前礼拝と茶話会が行なわれた。

明け方まで降っていた雨は午前中に止み、薄日が差す中、13時05分から北山輪王寺のキリスト教墓地において、中野敬一学院チャプレン司式の下、神戸女学院第5代院長シャーロット・バージス・デフォレスト先生の召天50周年を記念する墓前礼拝が行なわれた。黙禱に続いて讃美歌第300番(1954年版)を唱和し、司式者によってガラテヤの信徒への手紙5章13-14節が読まれ、めぐみ会への感謝の祈禱に続いて、飯 謙理事長・院長の奨励があった。

デフォレスト家の墓石はそれぞれの面が日本とアメリカに向いている。宣教師は常に平和について考えており、デフォレスト先生にも深い平和への思いがあった。それは戦時中マンザナの日系人収容所で奉仕されたことにも表れている。先生は1879年2月23日、大阪川口居留地で生まれた。幼児洗礼を同志社創立者・新島 襄氏から受けた。新島氏との関わりで一家は仙台に移った。仙台に現存しているデフォレスト館の子供部屋を見てきた。先生はここで人間関係を学んだ。その後アメリカで教育を受け、宣教師として来日、1905年から神戸女学院の教師となった。

先生の亡くなられた1973年はいろいろなことが多方面に進行していた年であった。いつも現在進行形で常に困難の中にある。先生は時代を先取りしていた人と言える。他者に仕えるという普遍的な人間観を示し続けた。卒業生の一人、武田清子国際基督教大学名誉教授の言葉に、自由とは隣りに仕えることであり、愛によって互いに仕える、とある。また、新島氏の死の直前の言葉には自然体であること、争わず、努めず(力まず)とある。先生は橋渡しをした人であった。先生が持ち続けたのは「神が用いてくださる」という信仰であった。私たちも隣り人のために、という使命を受け継いでいきたい。

最後に、先生を生かし用いられた力を私たちにも与えてくださるようとの祈禱を捧げられた。

一同で讃美歌第294番(1954年版)を歌い、飯先生の祝禱を以て墓前礼拝は終了した。

日差しは柔らかく、身体に感じる空気も穏やかな木立の中で集い、共に祈った仙台北教会の近藤 誠先生、教会員の方、東北学院大学の大門耕平先生、めぐみ会仙台支部の皆様をはじめとする同窓生、そして学院関係者一同。墓地を取り囲む大きく育った木々のように、50年という歳月を経てもデフォレスト先生の思いが色あせることなくさらに広く大きく人々をつなぎ続けていることを実感した午後のひと時であった。

会場を仙台ガーデンパレス 3階コンベンションルームに移して、15時からデフォレスト先生召天50年記念茶話会が持たれた。墓地から移動してきた方に加えて茶話会からの参加者もあり、29名が会場に集まり、開始までの間にあちらこちらで談笑する姿が見られた。

中野先生の司会によってまず黙禱が捧げられた。讃美歌第326番(1954年版)、祈禱のあと、前神戸多聞教会牧師で現仙台北教会の近藤先生の紹介があり、先生の挨拶があった。

デフォレスト先生のお父様は仙台北教会の前身となる東三番丁教会を設立され、新島氏が作った学校でも奉仕されたが、現在は教会のみが残っている。神戸女学院との覚書に従って仙台北教会でデフォレスト家のお墓を管理している。

続いて講演に移った。中野先生から講師・津上智実神戸女学院大学名誉教授の紹介があった。津上先生は音楽学部で当時としては珍しい音楽によるアウトリーチを始められ、学生の活動の場を広げられた。そして学内のデフォレスト研究の研究代表をつとめられた。

「近年のデフォレスト研究」と題してご講演くださった。

音楽学の自分がなぜデフォレスト研究を始めたのか。そのきっかけは大学で開講されている初期神戸女学院というリレー授業だった。自分が音楽教育を担当するにあたり、学内資料を探索調査していた折に、音楽部の成績簿を発見し

た。音楽教育の担当が Miss Elizabeth Torrey からデフォレスト先生に代わった時、授業で今日のスタンダードといえる教材が用いられていた。それを与えたのがデフォレスト先生であった。ハーヴァード大学ホートンライブラリーで宣教師文書を調査した時、他に類をみない分量の手紙を先生が書かれていることを知った。先生が如何に熱心に手紙を送られていたか。キャンパス移転は常に資金難との戦いであった。日米の組織の法人化は先生の力による。また、仙台のデフォレスト・メモリアル・チャーチ建築資金についてもアメリカンボードの助力を得て募金を募っている。先生は1905年神戸女学院赴任と同時にキャンパス移転のメリットを述べている。この時から岡田山への道が始まっているといえる。先生は女子教育の理想を求め続けていた。教会への感謝も書かれている。

講演終了後、デフォレスト先生の肉声が会場に流れ、皆はお茶を飲みながらその声に聞き入った(「或る日ノ感想」創立150周年の Statement になっている箇所)。

飯先生から神戸女学院の近況が報告された。中高部・大学の現状と将来計画についての説明があった。良いものは一代では出来ないというメッセージが先生の声からわかる。神戸女学院の教育は昔も今も愛神愛隣、対人援助を主軸に置いている。

松永千香院長室課長からテーブルごとに出席者の紹介があり、その後一同でデフォレスト先生の詩が歌詞になっている125周年記念歌 Beauty Become a College を歌った。出席者の一人、元神戸女学院図書館職員・手代木俊一氏から作曲者・澤内 崇神戸女学院大学名誉教授が「この作品が自分の最高傑作」と言っていたというエピソードが紹介された。

先生の目指した生き方に私たちも歩み出していくことが出来るようにとの祈禱が捧げられ、茶話会は閉会した。最後に皆で記念撮影をし、それぞれが次の目的に向かって三々五々会場を後にした。